

場所論と教育相談：陸上長距離選手の症例を通して

荒木, 正見
福岡女学院大学：教授

<https://hdl.handle.net/2324/1683785>

出版情報：福岡女学院大学紀要. 6, pp.71-96, 1996-02. 福岡女学院大学
バージョン：
権利関係：

場所論と教育相談

— 陸上長距離選手の症例を通して —

荒 木 正 見

3

「福岡女学院大学紀要」第6号抜刷
Fukuoka Jogakuin College Bulletin
1996年2月

場所論と教育相談

— 陸上長距離選手の症例を通して —

荒木正見

小論は、哲学的場所論の実践的応用について論ずるものである。哲学は最も普遍的な学であり、普遍と特殊を内包する個別的な性格を持つ実践的日常と常に密接な関係にある必要はない。学問それ自体の普遍性を貫くためには、敢えて個別的日常に背を向ける態度も必要である。しかし他方で、学問の自己満足に終わるのではなく、時には個別的日常の場に学問をおくことによって、学問それ自体の発展に寄与することもある。普遍とは、すべての特殊に適用できてはじめて、真の普遍といえるからである。個別的存在である筆者の普遍探求と個別的日常的実践との接点が研究活動や教育活動である。小論ではこの接点における一症例を報告し検討することで、研究と実践の双方に寄与することを期待する。なお、今回の教育相談は、症例研究で述べるように、対象に応じて場所論的アプローチがふさわしいと判断したもので、理論の仮説的検証ではない。症例は症例自体に語らしめるのが原則であり、治療や相談に携わるものは、可能な限り多くの側面に対応できる本質的理論を準備し研鑽しておかなければならない。スポーツ選手の相談に携わるものが、喫煙するのは恥ずかしいことであるように、最も良いコンディションを想定し実践することさえ求められる。小論ではそのひとつの可能性を検討する一例として報告するが、相談者とともに汗を流し、様々な理論や可能性を試行錯誤した軌跡でもある。時にはそのような総合的な取り組み方が、総合的な存在である我々に必要なのではないだろうか。

1. 場所論と教育相談

小論における哲学的主題は場所論であり、実践的応用は陸上長距離選手の教育相談である。双方の理論的結び付きの見通しは以下の通りである。

場所論は、最も広義に捉えれば、場所に関わるすべての問題をその研究領域とする。最も根底の哲学的場所論は、哲学の主要問題である存在という場について論ずるものであり、最も普遍的な存在が、いかに特殊な存在へ分化するかを論ずるものである。そして、西田幾多郎の場所論は、「場所」こそが絶対的な存在そのものであると述べた点で、最も普遍的な構造を持つものである。筆者は西田幾多郎の場所論の構造について既に論じたし¹⁾小論の限られた紙数では詳述する余裕も無いので、ここでは主に西田幾多郎の論文「場所」(大正15年)²⁾に示される場所の構造を簡潔に記述する。

西田幾多郎の「場所」とは、存在そのもののことであり、特定の場所ではなく、最も完全かつ絶対的な唯一の存在そのものを意味する。西田幾多郎が存在を「神」「存在」「絶対者」などと他の哲学者のように名付けなかったのは、名付けは主観の枠に囚われていることでもあり、主客対立的図式の一面に閉じ込められるという危惧からである。唯一絶対の存在そのものは、その一部たりとも欠けてはならない。とすれば存在そのものを「存在そのもの」とも呼んでも主観的な名付けになり、主観の枠に入れ、その外に真の存在が残りかねない。そこで本来は名付けることはできないが、最後の呼び方として「あること」の外側から「ありか」すなわち「場所」と呼んだ。

さらに西田幾多郎は全体としての場所のみを語るわけではなく、全体と特定の個の関係について「場所の自己限定」を、「個による場所の限定」との相関で述べる。今、我々が感じるすべての事柄は、時間空間のすべてである場所の総体によって構成された特定の事柄である。この構成が場所の自己限定である。ところで、もう一度全体としての存在を顧みると、我々が思うことや感じること、我々が行為すること、それらの特定の個々のすべてが全体そのものでもあるし、それらの特定の個々のすべてを通して初めて全体が直観

されるのであるし、特定の個々のすべてによってこそ、全体は発展するのである。すなわち、ここに「個による場所の限定」が成立する。場所の自己限定によって個が成立し、個による場所の限定で全体が発展するというこのダイナミズムを西田幾多郎の意味で、弁証法的発展と呼ぶ。この発展的な運動こそが、西田幾多郎の場所論の神髄であると言える。

さて、ここに示される全体と個との発展的な運動を含む関係構造は、そのまま、特定の場所と、その場所における個との関係構造でもある。発展のダイナミズムを有する点においては、教育相談といった成長のダイナミズムを要求する場面で、実践的に応用できる可能性がある。そして、症例そのものからそのような実践の要求が生ずれば、全体的な考察のひとつの軸に据えてみてもよいのではないか。小論はそのような試みの報告である。

2. 症例

（1）本例の端緒

本例の相談の端緒は東京のT大学陸上部の監督からの電話に始まる。現在18歳、一年生のY君（男性）が、突然合宿所を抜け出し、埼玉県の実家に帰ってしまったという。深い悩みがあるのか、単なる五月病的症状なのか不明であるが、親元に電話しても母親が出るばかりで本人は電話にも出ない状態だという。陸上競技の名門高校から推薦で入学した有望な選手で、陸上競技を止めると授業料免除が剥奪され不利な状態になるし、高校時代には大きなタイトルをとったこともある有能選手で、将来的にも恵まれた立場が予想され、なんとか陸上競技の世界に戻したい、というのが監督の依頼であった。

（2）本例の問題点と場所

筆者はまず、この症例は、象徴的な事柄を手がかりにして短期間で特定の治療目的を達成するというブリーフセラピー³⁾に相当するものと判断し、その象徴的な事柄として本人が寮という場所から、実家という場所へと移動したことに注目した。本人が選んだのは場所移動という場所論的テーマであ

り、双方の場所がそれぞれの個々の構成によって象徴している意味があり、移動することで起こる意味の変化に本人の生存がどのように関わるのかが問題になる。現在の日本社会と、本人の現状を考へて、この生存の質の変化に関して危惧したのが監督である。この点を本人が理解した上で、なお、実家での生活を望むのならそれも個人の人生ではある。その点の真意の確認に今回の相談の原点がある。しかもその真意とは、本人が自覚しているものばかりではない。ここに、筆者の関与すべき点がある。おおまかにはこのように考へるとして、双方の場所の意味論的絡み合いがほぐれたとき、本人の問題は解決するはずである。

このような場所論的発想をふまえて、監督に対しふたつの相談現場を提起した。ひとつは筆者が上京し、埼玉の実家で本人と面談するというものであり、もうひとつは、本人が福岡の筆者を訪れて面談するというものである。

前者は、本人のエネルギー負担が少なく、精神的肉体的にエネルギーの消耗が激しい場合には有効である。反面、安直なゆえに立ち直る意欲を減退させたり、セラピストやアドバイザーの負担が大きいくという短所がある。

後者はこの反対で、本人のエネルギー負担が大きく、本人のエネルギーの消耗が大きければ、立ち直り再統合するに至らない惧れもある。反面、セラピストやアドバイザーにとっては、自家薬籠中の指導が可能となるし、ゆとりをもって対し得るという長所があり、またさらに、この場合、場所論における場所のダイナミズムを活用できる可能性もある。

場所のダイナミズムとは、一般的には場所に関わる力動と規定するしかない。個々の場所は、西田幾多郎の「場所」に支えられた重層的な場であるから、常に潜在的な絶対的存在を背景とし、上記のように個々の特殊な存在が成立する相関的な運動が内包されている。場所が問題となる時、現実的な個々の場所を操作することで、場所を背景とし、家族や社会や自然や存在すべてを内包する心身一元的な人格を変化させることが出来る。上田閑照『場所 二重世界内存在』では、「場所」を西田幾多郎と類比的に解した上で、場所の構造を「世界内存在としての我々にとっての世界が最終的に世界／虚空

という二重世界，ないしは世界地平に『地平のかなた』が重なった二重世界である。」と，我々の世界は認識されうる世界とその外に広がる虚空との二重世界構造を持つとされる⁴⁾。しかもこのような二重世界において存在する自己は，虚空という自己認識できない無限のエリアをも含むので，自己であるとは自覚できないし，時としてそこに物質，神といった超越的な実体を仮想したりもするが，やはり，一元的な自己でもあるのだから，この主体は，主観的な色合いを脱して「自己ならざる自己」と呼ばれるものである⁵⁾。自己が自己ならざる自己として，いわば普遍的な絶対そのものでもある事態は，西田幾多郎の構造と類比的に，場所論を教育相談と結び付ける論拠になる。

この例として筆者が受けた相談のひとつに，かつて次のようなものがあった。首都圏の男性から，拒食症の疑いのある大学生の娘の治療の仕方についての相談を受けた。話の状況から，首都圏の近所の内科医は症状に対応できていないことと，家族内のトラブルが，本来最も快活な当の娘が心理的に負担することで落ち着いている，という家族内力動とが察知された。そこで，心身症の治療では名のある，福岡市の大学病院での受診を勧めた。遠方での受診は大変ではあるが，首都圏と福岡という距離が，心身の全てが複雑に絡み合う症状の構造を変えることを期待し，もちろん，福岡の当の大学病院に真に信頼に足る優秀な医師がいて，最終的には彼から首都圏の優秀な医師を紹介出来ることを前提としていた。その一家は，娘がそれほど遠い所に治療に行かなければならないということで，事態を深刻に受け止め直し，家族の努力が開始された。家族内の困難な雑用も，娘を外して共同でしなければならなくなった。二週間後，福岡で受診した時には，娘の体重も増え，活発さを取り戻し，治療の要点は終結していたのであった。これほど劇的な症例は少ないが，旅行での気分転換などは，日ごろ体験するところである。

小論の症例でも，福岡という場所の利用が望まれたが，エネルギーについては，筆者には情報が乏しいので原点に返り，当事者の態度から判断した。

まず監督にふたつの可能性を挙げると，すぐに後者を決断した。監督は直観的に，本人のエネルギーの状態を判断したと見做すことができる。次に本

人であるが、先の事情から困難が予想された。深夜、母親からの電話で、とても切り出せるような状態ではない、という報告があったので監督に伝えると、監督は母親に強く指示したようで、その直後に母親から次いで本人から、翌朝の飛行機で福岡に来ることが伝えられた。当初の監督の相談からわずか数時間後に、その数時間後の出発が決定したのであるが、これは、状態が固定化しないうちに早めの対応が出来た点で、好ましいことである。また、激しく反抗し、親の対話さえ拒否していた本人が、監督の強引な連絡があったにせよ、福岡に、ということを知りすんなり受け入れたというのは、明るい見通しを予測させた。これは今回の相談に場所論的発想を入れ得ること、監督の直観の正しさを裏付けるものでもある。しかし、電話での本人の声は消え入るようで、やはりかなり参っていることを予測させた。

このような急激な事態の展開の中で翌日の面接を待つことになる。

(3) インテーク・インタビューと箱庭療法

福岡での教育相談で、はじめに考えるべきは、相談の場所や宿泊場所である。以前、拒食症の疑いのあるランナーを預かった場合には、病院近くのホテルと筆者のオフィスとの双方を有機的に用いたが、とりあえず筆者の自宅近くのオフィスに決め、様子次第で柔軟に対応することにした。

翌日昼、空港からタクシーで、筆者の自宅とオフィス近くに着き電話してきたので赴くと、すぐに近づいて来て挨拶した。初印象は、身長1m78cm、体重58kgのスリムな身体はさすがにトップランナーの器であることを感じさせたが、初対面の緊張もあってか挨拶はぎこちない感じで、はやりの染めた髪形や物腰は高校生の雰囲気である。手にした荷物はナップザックひとつで、遠征特有の大きなバッグではなかった。走ることを忘れようとしているのかと、潜在的な心理を考えさせられた。

小さなマンションの二階にあるオフィスに入って、筆者の自宅のすぐ近くであること、すぐ前に300mのジョギングコースを含む公園があること、福岡市南部の住宅地であり、10km以上のジョギングも自由にできること、スー

パーマーケット等も近くにあることなどを話すと、合宿所周辺の雰囲気などと比較しながら、ここに泊まりたいと述べるので、当面その方針をとる。それは筆者と筆者を中心とする場所に対してラポールを見いだしたことを意味する。また、ある種の落ち込みはあっても、深刻に将来を悩むという方向性ではなく、子供がのんびり休みたがっているような方向性であり、ひとりで泊めてもトラブルを起こす状態ではないことも判断の基準にした。

次にインタビューである。相談の常識としてこのインタビューに成否がかかるので、細心の注意を払い、綿密に考察を繰り返した。

まず、このインタビューを含めた判断基準の大きな方針として、数値的なテストは避けることにした。数値に対して過敏に反応することをランナーたちとの長い関わりで体得しており、数値以外の象徴的判断でも有効なのがブリーフセラピーでもある。即ち、行動の示唆するものが象徴的判断の第一に挙げられる。これには、E.エリクソンの発達図式やボディランゲージの知識などが参考になると思われる。第二には、ランナーであるから、適宜後述するような走り方や歩き方が判断の目安になる。第三として、無意識の状態を知るために箱庭療法を用いることにした。この三つが常に意味連関を示すように考察を重ね、論理的関連が曖昧な場合には、言葉による確認や、状況の確認などを綿密に行った。

はじめに、主訴を確認するために、今いやだと思っていることについて尋ねた。すると、寮の状態を述べるのではという予想に反して、右膝の故障について話し始めた。高校生の時から、右膝関節の内側になにか飛び出して、それがはっきり見えて来ると痛むという。整形外科の範疇に属するが、とりあえず見ると、たしかにその箇所に、瘤のようなものが現れている。二年くらい前の整形外科医の診断では、軟骨がずれているという。しかし、たいして治療する必要はないという当時の診断から、痛みをこらえてレースに出場し、好成績を挙げてきた。靴の減り方を確認すると、左の踵部分の方が右の踵部分よりも減りが大きく、右足の故障をかばっていることが窺われた。また、全体に足が細く、特に膝部分の細さは、天才ランナーであるとともに、

故障し易さを感じさせ、基礎的な筋力練習が必要なことを窺わせた。故障については筆者の専門性を超えるので、帰京したらすぐ専門医にみせることを勧めた。基礎的な筋力練習に関しては、このあと山歩きなどの適性を考える契機となった。また、これらのことで、今回の相談の焦点は、膝の故障であり、それをキーワードにしつつ進めていけばよいという見通しが立った。

なお、靴の減り方は踵部分が真っすぐ減っており、小指の付け根部分の減りは殆ど無い。逆に親指の付け根に当たるところは特に平たく減っている。このことから、体重を爪先にかけ、真っすぐ蹴り出していくスピードランナータイプであることが分かる。その場合、特に本人のような大型ランナーでは、体重が強く前膝にかかるので、今回の箇所に故障しやすいということも判明した。一般的には5000mくらいまでの距離では、このようなスピード型は効果的である。しかし、フルマラソンを狙うというのなら、場合によっては着地をフラット型に変えた方が安全かもしれない。但し、このような変更は重大なことであり、軽薄に判断してはならない。長く直接関わって行く監督の、総合的なデータをもとにする決断こそが、唯一のものであろう。

次に監督からの依頼にあった今回の異常な行為について尋ねると、寮の門限(22時)が嫌だということと、先輩に気を使って疲れるということを述べた。陸上競技そのものに対する疑念が出ることを予測していただけないか、はやくもひとつの関門を突破したという感触を得た。そこで、もはや陸上競技を続けることが前提であるかのようにして、早朝練習が6時から始まるのであるから、10時就寝でもぎりぎりではないか、と問いかけ、また、同室の厳しい先輩は競技者の姿勢として尊敬できないかと尋ねると、少し気まずそうな顔をして黙っていたが、心の深層が動いているような、軽くうなづく仕草をした。

緊張が高まり、手先に小さな震えを認めたので、これ以上は、エネルギーの消耗が激しくなると判断し、リラックスを兼ね、エネルギー消費の深い原因を探るために、傍らの箱庭療法を勧めた。部屋に入るなり、砂箱を気にしていたのが、導入の契機となった。オフィスの事情から、玩具類は箱に入れて天井に届くほど積んであるので、選びやすいようにするのを手伝わないか

と言うと、すぐに、積極的に手伝い始めた。これで、動機づけが完了した。

箱庭療法 (Sandspiel) は、『場所 二重世界内存在』では原語に帰って「砂箱遊び」と訳されているように、砂箱という限られた場所に自由な材料を並べ砂を造形するものである。この技法については筆者は先に『心身症と箱庭療法』(共著)⁶⁾で述べたので小論では割愛するが、中村雄二郎『場所 トポス』においても場所論の具体的問題例として述べられ、「患者は砂に触れつつ、おのずと自己の意識の深層をイメージ化して表現することになり、そのようにして得られた世界との一体化が、心理療法として効果を挙げている。」と、特に注目されている⁷⁾。この引用からも分かるように、さらに、拙論「箱庭療法の基礎と文化的総合性」で、素材として退行を促す砂と、再統合を促す箱の役割について詳述したように⁸⁾、箱庭療法は、特定の限られた場所でありながら、その素材によって促されるものは場所と場所構成の心理的意味である。そして、『場所 二重世界内存在』では、砂箱という認識できる世界に対する、砂箱の外という虚空の関係を重視する⁹⁾。箱庭表現からはじまっ

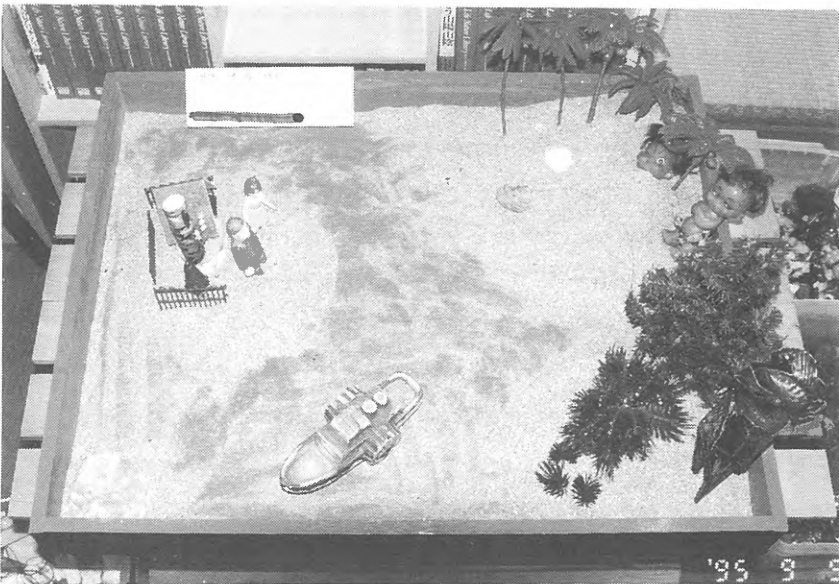


写真 1

て砂箱の外、すなわち筆者やオフィス、福岡という地、そして、宇宙へと開かれていくその全体の場合こそが治癒や成長の手掛かりである。

写真1がこの箱庭表現である。制作時間は平均よりやや短い30~40分で、制作態度は、楽しみながらも真剣で素朴なひたむきさを感じさせた。

これまでの状況から対話に於いてやや防衛的かつ対話訓練が未熟な印象を受けたので、退行しているいまこそ、少し語らせた方が訓練にもなり、本当の気持ちを語ると判断し、確認の為の質問をした。予想どおり以下の内容を良く喋った。相談の場の中で、箱庭という小さな場を媒介にすることで防衛が取れ、気楽に話せる雰囲気生まれたのである。

ところで、分析は言葉による意味の置き換えなので、解釈学的には真実の意味を最もふさわしい異種のものに置き換えたにすぎないという宿命を持つ。そこで以下の分析は、あくまで象徴的な意味合いのレベルにとどめて理解しなければならない。表現される言葉は、あくまで筆者にとってのみ本質理解にふさわしいとして選んだ、特殊な言葉であり、本来はすべて「である。」と述べるのではなく、「と思われる。」と述べるべきものである。しかし、同時にその言葉を通して、少しでも普遍の意味を示唆するよう努力する。

はじめに作った所は、意思や希望が現れやすい右上領域の砂浜であり、はじめに作ったものが、その砂浜に埋まって、剽軽にも片目をつぶっている幼児の人形であり、この埋まっている場所が好きだという。これはまず、このような状況を希求していることを意味する。その領域の一般的意味からも、はじめに作ったということと、そこにヤシの木を最後に置いたことから、この希求性は強いものである。これは疲れている、休みたいという本人の現状を如実に表している。この点は、十分配慮しなければならないし、場所論的には本人が福岡にすみやかに来たという事実の中に休養の意図があったことになる。また、福岡にヤシの木のような南洋の樹木が生えていることを期待しているふしがあった。休養の期待をこめて福岡という場所を、現実離れた、ユング心理学の言葉での、意識世界においては実現されていない事柄、「影」として認識するのは、休養を志向していることの重要なヒントになる。

影という概念は、ユング自身は、当初“Seele”もしくは“Seelenbild”などと呼んだように¹⁰⁾、概念として曖昧な点もあるが、1977年に河合隼雄『ユング心理学入門』¹¹⁾で「影」という名称が用いられてから定着した。

最後に作ったものは、無意識の深奥が現れやすい左下領域の火山である。これは、潜在的なエネルギーの大きさを示す。ただ、現実の火山のように、そのエネルギーが暴走すると、生活の破綻を招きかねない。本人の仕草の中にその可能性の根本を観察すると、例えば、鉛筆の握り方が悪く字が幼児的な線表現だったり、兄、姉のことを「にいちゃん、ねえちゃん」と呼ぶように、家庭内で訓練されるべき社会的な基礎知識が未熟なことが挙げられる。そこで、社会的仕組みや、陸上競技や監督、選手の社会的意味などを、実例を駆使しつつ語ることを、その方法のひとつに組み入れることにした。

さらに注目すべきは、右下の30cmの高さの甲冑人形である。箱の中のこの領域は、現実的な状況が出易く、隠れたテーマが現れ易い場所である。本人はこの甲冑人形をロボットだと言い、好きなものだという。全体を見下ろすような高さで、強い男性的要因から、本人の環境を考えてこれは父親的要因、現実的には実父および監督であると推測される。それは好きなものではあるが、前を木々で覆ってある。その状況、その場所、ロボットであること、父親的要因、現状などは、父親的な要因を身近な対象から得たいと思いつつも、未だよく見えない、理解出来ないという状態を意味する。実父のことを聞くと、おとなしく無口でなにを考えているのかよく分からないと言い、尊敬しているともいう。監督についても、監督が言おうとしていることがよく理解できないと言うが、強く尊敬しているのである。箱庭表現とこのことは全く一致する。彼に話すべきは、大人になるにはどうするのか、大学陸上部の監督がどれほど社会的リスクを背負って献身的に働いているのか等の具体的な例だという見通しが立った。特に本人の監督は重い故障を克服してオリンピック出場を果たしたトップランナーであり、絶好の手本なのである。

さらに、嫌いなところは左側の家である。そこには、老人の姿をした父親と、少女の姿をした母親が並んで立っている。家自体は、非現実的な意味合

いをも持つ山小屋である。本人の家庭は、実際に50代半ばの父親と10歳若い母親という組み合わせでもあるが、それ以上に両者の人形の年齢差が大きく立派な父親像に対して母親像の幼さが目立つ。これを「ひとつしかないさびしい家」という本人の実家イメージから、合宿所から実家に逃げ帰った行為は、決してプラス思考から生じたものではなく、単なる退行、すなわち子供返りでしかないことになる。発展的な意味ではないことを、その家をきらいだと答えて、本人が自覚している。

実家という場所に対するこの意味に、今回の相談に対する解決の糸口と目標がはっきり見えてくる。端的に言えば、それは現在の退行状態を如何に高い再統合へと導くかということである。それには、左下、最も無意識的な領野を目指す船が手掛かりになる。本人は今、無意識の自らのエネルギーの源に関心を向けようとしている。それを喚起し励まし、その上でこの無意識のエネルギーを本人にとって形にできる方法として、これまで自然に陸上競技を選んで来た、という理論的脈絡を折りに触れて語ることである。

(4) ランニングと対話指導

それには、もう少し強いラポールが必要であり、故障の状態をも確認しなければならない。そのためにさらに場所を変え、すぐ前の公園のジョギングコースで一緒に走ってみた。トップランナーと一緒に走るというのは、中年の貧しい走力の筆者にとって辛いことではあるが、この行為を選ばせたのは、箱庭表現の本人に好ましいロボットである。大人とは好ましいものとしても、大人としての筆者は、ロボットよりもう少し生身なのだを示したかったのである。その上で、筆者が学術的な知識を背景にして語る事が重要である。そこで、筆者があえぎあえぎ走ることも意味がある。

まず、膝の故障を考えて、膝が痛くなるまでは少しずつペースを上げていくようにした。勿論、それは表面上のことで、実際には、呼吸の乱れ、汗の状態、ランニングフォームなどのランナーとしての資質を観察するとともに、このような行為の中で、ランニングの快感を思い出し、人生の一齣にラ

ンナーであることを組み込んで生きて来たことを再確認させるのが狙いであった。そして、なにより大切なことは、一緒に走るということである。

はじめに、リハビリの常識として7min./kmのペースでスタートした。筆者さえじれったいこのスピードでは物足りない様子であるが、それだけに足音が明確に聞き取れるし、走るという退行状態で防衛が取れ、自然に喋りながら聞きにくいことを尋ねることが出来る。足音に関しては、靴の裏で予想した通り、右足の着地の方が左足に比べて音が小さく、膝の故障を窺わせた。そのことも含めて肩に力が入っている。上半身の力みについては、トップスピードの時に現れ易いのは当然であるが、呼吸が楽なスローペースの時に意外にも示される。腕の置き場に困るという状態である。かつて、腕を下ろすことを勧めて、好成績に結び付けた数人のランナーの話などしながら、腕を下ろすことを勧めると、下ろして楽な感じで走るのであるが、やはり、またすぐに肩で支えていく。案の定、頭痛になることがあるという。今後のひとつの練習課題であるが、同時に、本人が特にフォームを考える必要のなかった天才ランナーだということをも意味する。これは小さくまとめてしまわないためにも必要なので、最後にはっきり説明し、自信を喚起した。

5~600m 走ったところでペースを上げ、6min./kmで300m、そして、平均的なLSD（長距離緩走）程度の5min./kmでしばらく走りつつ、話や観察をした。気掛かりな左右のバランスはむしろ落ち着いて来たが、それは、スピードをあげるためにかばうことも出来なくなって来たことを意味する。いずれ痛みが出ることは覚悟しなければならない。そして、膝の故障をひとつのテーマとして、賢明なランナーを目指してはどうか、ということを中心に話した。すなおに「はい。」と答えたが、このペースで走っているさ中、表向きだけの返事にはなり得ない退行状態であるから、その返事は真実である。

1000m 程度走って、今度は4min./kmで300m、さらに3min.30sec./kmで300m、そして、3min./kmにあげるや、本人が膝の痛みを訴えたのですぐにランニングを中止した。ふだんの練習ではそれ以上のスピードでさらに走り続けるが、ここはそれが目的ではない。

痛みが出る状況では、歩幅が広く膝が上がっていたので、ゆるく膝を上げさせるとやはり痛む。市川宣恭編『スポーツ指導者のためのスポーツ外傷・障害』にも述べられるように¹²⁾、大腿四頭筋や膝蓋靭帯が未発達であればこの種の痛みが出易いのは常識であるし、先程の観察でもそれは見て取れたので、超回復 (supercompensation)¹³⁾ を自覚した有効な練習と休養、生活が必要なことを述べるとともに、この件は専門家の領分で、過去の診断とも変わって来ているかもしれないので再診察を勧めた。かつて言われた骨ではないような印象を持ったので、なおさら勧めた。そして、先程と同様、膝の故障をを如何に捉えるか、故障や不安、不愉快な出来事などは、当面マイナスにしかとれないかもしれないが、将来、先輩となり、指導者となれば、むしろプラスになることなどを話した。

ここで夕食となり、自宅で一緒に食事をとった。実業団のランナーに比べれば、全体の摂取量が少ない。普通の人食事よりは、20~30%多い感じであるが、野菜をたっぷり食べようという姿勢は好ましいものであった。

夜はひとりで自由にさせた。筆者自身のトレーニングを兼ねて、先の公園に走りに行き、窓越しに異常が無いか確認したが、落ち着いた様子であった。

夜、監督に報告の電話をした。陸上競技を続けられそうだという見通しを述べると、ほっとされた。二泊くらいで大丈夫だということを述べると、そんなに早く、という反応を示された。東京での彼の態度だけをみれば、その通りであろう。膝の故障については、本人の意志が固まれば、監督としては長い目で見ることがのできるの、著名な病院で徹底的に検査し、手術をも選択肢に入れた治療を考えると決断された。また、実家の母親から電話が入った。宿泊場所には電話が無いことが親としては心残りの様子だった。元気にやっていることを話すと安心された。

ここまでわずか半日の接触であるが、当初のおどおどした感じは無くなり、筆者を信頼して何でも話すようになった。また、陸上競技については、本人自身の能力と可能性が大きく、やはり長距離走に指向していることが自覚できてきた以上、あとは、その自覚を明確な形にしあげるだけである。今

回のセッションは成功する見通しが立って来た。

（5）山歩きと対話指導

翌朝、8時に食事開始。朝食は、普通の人の120～130%とった。野菜をしっかり食べるのが心強い。これまで良い指導者についてきたことが窺える。

そろそろ仕上げができるという見通しで、近くの山歩きを選んだ。『スポーツ指導者のためのスポーツ外傷・障害』でも述べられるように、膝の細さから痛みが出るのはこの症例にも通用するし、山を利用して膝を強くする練習方法を覚えることも必要である。また、栗山節郎／山田保『アスレチック・リハビリテーションの実際』でも、筋力増強訓練として、「痛くない範囲で行う。」「安全な範囲で付加する。」などと記されるように¹⁴⁾無理をしない筋力増強も必要である。関節については同書でも「関節の不安定性が強い場合は、テーピングや装具を使用して」行うよう述べられているように¹⁵⁾、今回も念のためテーピングで補強した。過去にもこのような山歩きをしたが、練習成果とともに、自然という柔軟な環境で心身の素直な退行が得られる。

登山口から山頂まで、標高差で500m、平面距離で2000mであるが、実際に歩く距離は片道ほぼ3000mである。福岡市周辺は大都市圏にしては珍しく山が近く、なかには標高1000mを越えるものや、尾根を数十km以上も歩けるところもあるが、今回のような場合には無理は禁物である。この山はとりあえず様子を見るという程度ながら、標高600mくらいで山頂からの景色も良く、爽快感も味わえるという便利さからしばしば利用している。しかも帰路はすべて歩いて一時間強で山頂から自宅まで帰れるという便利さである。

さて、歩くといっても練習および状態の点検を含むので、速度は急坂を昇るにはかなり早い時速5km程度に設定した。12min./kmに相当するので走るのに比べればゆっくりしたペースではある。これは、脚、特に関節に対する負担は少なく、ふくらはぎなどを太くする働きがある。とはいえ、平地で速足で歩くくらいが時速4km程度であるから、急坂を昇るのにかなり早い速度である。このスピードで昇った約35分（ちなみに案内板によると1時間半

コースである。)で、筆者は汗びっしょりになったが、本人はほとんど汗をかいていなかった。これも本人の底力の強さを示している。

木々に囲まれた森林浴コースを昇れば、心身ともにリフレッシュできることはいうまでもないが、本人の場合は特に、膝の故障の程度や質を観察することができる。結論を先に言えば、この間は全く痛みを感じなかった。重力がかかる下りは特に気を配ったが、痛みは生じなかった。このことが外科的にいかなる状況にあるかは専門家の判断にゆだねなければならないが、痛くないことは練習として行った方がよいという一般的な観点からでも、このような山歩きは、本人にとってふさわしい練習であることが分かる。故障でトップスピードの練習が難しい場合には、その故障を早く直すためにも、周辺の筋肉や循環系をトレーニングしておくことが必要である。特に山などの自然的な地形は、クロスカントリー走やファルトレックに用いられるように、総合的な力が蓄えられる。それは、心身の楽しさを喚起するとともに、自然の地形に身体が反応することで、満遍なく細かい筋肉が付くからである。練習も出来ずぐずぐずするばかりでも、心身の悪循環に陥るであろう。そのような時にも、山などの自然を利用するのも有効な手段だといえる。

しかし、痛む練習や大きな故障が予測される練習は逆効果である。筆者が以前、拒食症の疑いのあるランナーを預かっていくつかの山を歩いた時には、極端な体重減の時期で筋肉も脂肪、ゼラチンも全て消費しているので、決して走らせないということを、監督とも話し合い実行した。ランナー自身が解放された気持ちで走りかけるのを叱って止めるとベソをかくなどということさえ生じた。また、山岳を走って大きな成果をあげたランナーから求められたアドバイスでは、下りの重力に気をつけること、疲労回復に平常練習以上に留意することを特に伝えた。いずれも、故障を避ける手段である。

さて今回の場合、本人が自立的な大人のランナーへと脱皮することも課題のひとつであり、走ることや練習の総合的な知識を伝えることも必要である。山をともに歩く時は、ラポール、相互信頼関係も出来やすく、程よく退行しているため、実感できるアドバイスは、海綿に水が滲みるように吸収す

る。ここでふさわしい知識とは、上記の山や自然を利用したトレーニングの意味や効果、危険性などである。本人は興味深そうに聞いていた。

また、この状況で、箱庭療法で示唆されていたいくつかの点を確認し、それを解決することを試みた。陸上競技を続けるかという大問題については、あっさり「がんばります。」のひとことで決着した。寮を抜け出したり、自宅で陸上部について悪態をついたりした行為については、幼稚さを指摘すれば素直に反省した。大人なら帰ってからどうするかを聞くと言い渋っていたので、謝ることだと告げれば、はっきり「はい。」と答えた。この「言い渋り」が本人が受けて来たこれまでの教育の粗さを意味しているので、行動療法的に具体的な仕方を考慮しつつ誰と誰に謝るのかを聞くと、監督が今回の来博の理由をエスケープではなくて膝の治療という名目で主将や先輩に伝えていることを述べるので、「誰に一番謝らなければならないのか、はっきりしているな。」と聞くと、素直に「はい。」と答えた。箱庭表現に示されていたようにいままで漠然と考え、敬遠していた監督が、いかに自分にとってかけがえのない存在であるかを自覚してきた様子であった。

また、大人のランナーは高校までのようなコーチにばかり頼る練習ではなく、意欲的な練習や生活が必要だということで、かつて山梨県の合宿で、筆者があるランナーにアドバイスしている傍から、「私にも教えてください。」と、そのアドバイスを翌朝からすぐに実行して、数カ月後の国際マラソンで目覚ましい成果をあげたランナーの例をあげた。彼は奇しくも本人の高校の先輩で、最近も国際大会日本代表に選ばれた壮行会で会ったといい、ますます、自覚を促すことになった。他人の具体例を持ち出すことは慎重にしなければならないが、筆者は、その話を例の本人が聞いたとしてもますます練習の実が上がると予想される場合に限って、このように述べることもある。

オフィスでシャワーを浴びてから、自宅で昼食をとる。食欲は十分にあり、山の疲労度は僅かであったことを窺わせる。

(6) ロード走と自覚

午後は消化時間を考え、福岡という場所に対するオリエンテーションも兼ねて、街で普通に働いている人々と間近に出会えるバスで市内を巡り、平和台陸上競技場を訪れた。陸上競技のメッカであり、日本三大マラソン大会のひとつが開催される場所なので、いつかここでそのレースに出て勝つようにと自覚を喚起した。筆者もここで練習するためチケットを常時持っており、ここで走って見ないかと促した。競技場には、実業団や学生が来て練習していたのでいいかげんな走りはできない。いまそれだけの自信と自覚があるのかを確認したかったのである。本人は否定したが、それはまだ心身のエネルギーが消耗していることを意味する。その原因は、教育的な意味での、特に家庭教育における成熟の遅れと、もうひとつは膝の故障であろう。前者については今回を機に大幅な改善が予想出来るし、優れた監督や先輩という環境は、それを十分可能にする。後者は専門家に改めて相談するのがベストである。それが深刻でなければ、思い切った練習ができる。

平和台を避けたので、少し歩いて大濠公園へと向かった。ここはロードレースも可能な池の畔を巡る 2000m の循環コースがある。走路も合成ラバー舗装で足への負担もない。ここで好きなペースで走るのを観察した。タイムをとることは案の定断った。走りはゆったりして一見速く見えないが、計ってみると 4min.20sec./km でこなしている。気になるのは、前日と同様、腕ふりの堅さと、上体の不安定さである。無理に型にはめる必要はないが、多様な練習のなかで、自然になることを期待する。6000m 走ったところで、膝の痛みを訴えたのですぐ中止する。山を歩いた直後だけに予想出来たし、むしろ、膝の故障は思ったより軽いという印象さえ持った。

次に、同じ寮の友人の母校が公園に近いので、そこを通過して帰ることにした。運動会の練習をしている様子を眺めながら、本人の高校生活の話を聞いた。走ることに誇りを持っていることが感じられたので、尋ねるとうなずいた。同じ寮の学生の母校を尋ねることで、本人の気持を完全に寮に向けることが出来たはずである。

夕食は自宅できり、夜は自由にさせたが、終結する確認のためと、本人の気持ち象徴的に完結するために宿題を出した。A [今後の課題] とB [今回自分にとって役にたったと思えること] である。単なる反省をと言わなかったのは、ひとつでも否定的なことを文に表現すると、それが全体を代表する終結の意味に成りかねないからである。肝心なのは、このような文を書くことで、同時に成長しなければならないのである。

（7）箱庭療法と終結

自宅での朝食時に、昨夜の宿題を提出した。それが以下のものである。
 A [今後の課題] ①ひざのけがを利用して、足りない筋肉をつける。②「ひと味かわったな」と言われるような人になる。③人と違った工夫した練習をする。④素直に人の言ったことを受け入れる。⑤陸上に対して純粋な気持ちをもつ。⑥個性のあるランナーになる。B [良いと思った事] ①ひざの故障への気持ちがプラスの方向に考えられるようになった。②あまえている自分に気がついた。③監督がどれだけ選手の事を思っているか知れた。④ひざの故障の直し方やその練習方法を少しでも聞いた事。⑤監督には、話せない事をいっぱい話せた事。⑥心の中に落ち着きが出来て、リラックス出来た。

ABのいずれも、反発し刃向かっていたものがここまで変わり得るものかと思うくらい適確な回答である。筆者が暗に求めていたことの全てであるといってもよい。これは、潜在的に大きなエネルギーと可能性を持っていることを意味する。A④にもあるように、素直であるというのは、内面的構成が合理的であり、次の成長に対応しやすいことを意味する。これが可能性である。この可能性にすぐに気づくところがまた、本人の可能性の大きさである。さらに、B②に示されるような自己への反省も同様である。長距離走のように忍耐力のいる競技は、賢明でないと続かないと言われるが、言い換えれば論理的思考能力を持つことである。論理的思考能力のひとつの側面に意識の二重構造の活用がある。意識の二重構造とは、直接的に感じたり考えたりする当事者的な直接意識と、それを客観的に捉える反省的意識との二重性を指

す。この双方が柔軟に交流して一個の人格が成立するが、成熟した人格ができていなければ、前者に傾き、短絡的な行動に走る。論理的思考能力に、二重構造に起因する反省の能力が重要な役割を果たすのである。

これで終結を告げてよいが、文字での記述は、必ずしも無意識の深層を反映するとは言えない。そこで真の今後の課題を図る意味でも、最後にもう一度箱庭療法を行った。

写真2がその作品である。所要時間は20分程度である。

はじめに作ったのはトンネルを含む左上の山であり、はじめに置いたもの、そして、好きなものはトンネルである。トンネルは、文字通り暗い過程であり、やがて明るさの見えるものである。現状を考えれば、この「好きなもの」という言葉は、確認の結果「じっくりいくもの」という意味であり、「きれいなもの」は「じっくりいかないもの」という意味であった。この、中央部にまで山裾を広げる山は、潜在的エネルギーを意味するが、同時に未開拓でもある。このことは過渡的な意味を持つトンネルと同義でもあり、いわゆるテーマの反復であるから、ますますここに現在の状況が反映されてい



写真 2

とも言える。

さらに、好きなものはといえば、車だという。トンネルを抜けて、電話ボックスの側に止まったばかりである。いまのこの瞬間の実感であろう。そして、自分はその電話ボックスにいる。電話ボックスは、情報を待ったり送ったりしたいことを意味する。いま情報が欲しいことがあるのか、と尋ねると、整形外科医の診断だと答えた。このように、陸上競技に生きる軸を見つけようとする姿勢は、今回のセッションの成功と終結を意味する。

しかし、まだ未解決の問題もある。箱の左上の領野は、家庭的な現状が出易い場所でもある。箱庭表現はほかの表現形式と同様に多重性を持つが、トンネルによって示される過程性は、家庭に関する内面的な問題が自らのうちで解決に至る過程でもある、と考えれば、右下の家の意味が理解される。右下は、意識無意識の全体の現状の意味を象徴しやすい場所である。今回はその家を最後に置いたのであるが、その家には父母がいるという。家のそばに風車があり、あたかも、右の海によって象徴される無意識のエネルギーを汲みあげているように見えるが、本人は、この風車と海とは嫌いだという。一般的には、無意識の海やエネルギーを示す風車は、好ましい印象を持たれるものだけに、嫌いの意味の確認をとった。すると、海については、小さいところが、風車は本当は無い方が良いのだがどうしても置いてしまう、という返事であった。やはり「嫌い」の意味が、「本来の姿から言ってふさわしくない」と解すべきであった。それを裏返せば、大きな海を表現したいのだし、エネルギーは、汲み上げるのではなくむしろ自分自身に保持していたいということになる。これは本人の反省にとっても大切なことなので確認をとった。ここで家は、過渡的な、ややエネルギーの浪費を招く家でもある。但し、前回では、はっきり嫌いだと言ったものが、今回は、その属性としての風車と小さな海とに転嫁されたのだから、より具体性が増したという意味で成長している。また、現実の問題意識が最も出易い領野に、最後に表現されたということは、今回のセッションを通過して行き着いたのが、内面における家庭像の同一性の問題であることになる。これは今後に残された問題である

が、それに気づいたことで、現実の家庭を客観的に観察する仕方を覚え、成長段階からいけば今後家庭との距離を保つ行動が予想される。

かくして無事終結となったが、いよいよ帰るといふ時に、自宅に帰るといふ発想はすっかり消滅し、当然のように、直接寮に向かった。監督にしても家族にしても意外なくらい、スムーズだったようである。母親からの電話で、家から出て行ったのに、家に寄りもせず寮に向かったのは、なにかあったのか、と問われたくらいである。

最後は、本人の希望で博多特有の豚骨味ラーメンを博多駅で食べて、行動の区切りにはエネルギーを満たすことだと説明しつつ、終結宣言とした。

なお、その後の連絡では、膝の故障は軟性のガングリオンであり、手術は回避されたとのことである。また、数週間後の監督の報告では、帰京直後から態度、顔付き、練習意欲とも別人の様に良くなったとのことである。

しかし、学問的厳密さからいえば、ここで楽観するわけにはいかない。今回のセッションは冒頭に前提したようにブリーフセラピーに属するもので、当面の問題を、象徴的な事柄を手がかりにしつつ短期間で解決しようというものであった。その意味では、一応の立ち直りを得たことは成功であった。しかし、この治療法は長い治療の入り口でもある。今回発現して来たふたつの問題は、一般的には長距離走者にとって致命的になることが多い。ひとつは、これまでの家庭生活における父親的論理性的の欠如である。辛い練習やレースが長時間続く長距離走という競技には、自らを叱咤激励する能力が強く要求されるが、この症例の場合、それを遂行する内面的質が未発達であることを意味する。もうひとつは、膝の故障である。治療しない程度とはいえ、究極的には常に負荷を負って毎日の練習を行うのは、今後一流のランナーを目指すには重い負担である。しかも、このふたつの問題は常時絡み合って作用する。今回のセッションではここまで立ち直らせることは物理的に不可能であった。勿論今回獲得した本人の自覚はこの点も見据えたものであったので、長い目で見れば十分可能性はある。しかし、軌道に乗るまでには、まだまだ本人も自覚できない衝動的行動も起こるであろうし、指導者の苦勞は続

くに見るべきであろう。これが、事実の厳しさなのである。

3. 考察とまとめ

今回の教育相談例では、短期間に限定された目的を実現するブリーフセラピーの遂行という条件のもとで実践的な方法を用いたことが、第一の要点である。実践的方法是、身近に関るため成果を得易い長所がある反面、目先の状況に混乱し易い短所がある。この短所を補うために理論がある。

そこで第二に、今回では特に大枠的な理論として、場所論を前提とした。但し、特定の理論を前提にしようとする際、その理論の必然性を無視して適用すれば、ドグマに陥ってしまう。今回は、具体的な対人関係の中に成立した考察であるから、その端緒から常に特定の場所に対する本人の反応を参考にすることが出来た。その具体的な手掛かりと成果、すなわち、東京と福岡という距離の移動、面接や宿泊の場所、箱庭療法という象徴的場所、部屋とジョギングコースさらに山、福岡という土地の陸上競技に関する場所などの様々な場所と場所のダイナミズムの有効な利用とその成果については、既に述べて来た通りである。その過程で、本人の指向性とその都度の結果については、常に継時的かつ詳細に考察し続けた。

そして第三に、場所論の理論的背景には、個人はそれら多様な場所によって構成された存在だということがある。多様な場所は、それぞれにエネルギーを有する。それらのエネルギーをどのように応用して、個人の構成とエネルギーを変化させるかが、今回も主要な要素であった。今回の場合特に、エネルギーの消耗要素として膝の故障があった。物理的に、その点のエネルギーを充実させるのは医師の仕事である。しかし、その医師の仕事を充実させるためにも、総合的な人間と場所、存在などの調整と再構成、再統合を試みた。その場合の基本的な理論としては、退行と再統合の相互関係を主脈に用いたことは既に述べた通りである¹⁶⁾。限定された今回のセッションにおけるその成果は、本人が最後に到達した、「膝の故障を利用する」生き方に象徴されている。

さらに、第四に、その場所論を軸にして、心理学的、生理学的、そして、スポーツ学的理論が、その上で裏付けされつつそれぞれの理論的位置を占めた。この各自の理論が場所論という総合的かつ根底的な理論のなかで、どのような位置を占めているのかが明晰であることも必要であった。実際に関わっていれば、それらは混沌とした状態で迫ってくることはいうまでもない。それに対して常に冷静に対処するために最も困難であったのは、特にこのようなスポーツ選手の場合、筆者にもそれなりの体力が要求されるという点であった。もちろん、この点は、治療者やセラピストそれぞれの個性に応じて対応すればよいのであるが、今回の症例においては、筆者自身の日常のトレーニングが役にたつてよかったと思う瞬間がしばしば存在した。ある程度の体力があってこそ出来る教育相談も存在するのであれば、やはり、日頃から自ら訓練しておくのもあながち無駄ではないように思われる。そして、その上で成立するゆとりのある思考態度が、冷静な判断を導いてくれた。もちろん、重要なのはこの点である。

第五に、本症例報告に対して、筆者自身ある種の強い介入の危険性を自覚していたことは言うまでもない。短期間で成果を上げなければならないことと、その成果の目的がはっきりしていることが、むしろ逆に悪しき介入を招きやすいのは、教育の常識でもある。先に述べた理論の押し付けと同様、本人の期待していない状況に無理に連れて行くことが、悪しき意味での介入である。このようにならない為に、筆者は注意深く以下のことを考えつつ相談に応じ、解決を試みた。まず、最も根底的に考えたのは、「生存」である。一般に、本人の思う通りにすればよい、まして大人だから、といったことが語られるが、それには落とし穴がある。本人が思っていることが常に健全であれば、教育も心理治療も不必要である。要するに本人が思っていることが生存に反する場合に、教育や心理治療が必要とされ、この教育相談も求められたのである。従って、まず、監督の依頼にその生存がどう関わるのか、を考え、次に、本人がそれを理解した上で拒否するのなら、その場で帰京させることをも選択肢に入れた。結果は本人がむしろあっさりとのセッションに

参加し、生き生きと実行し始めたのであった。しかし、それでも筆者のドグマに陥らないように警戒しなければならない。本人の能力や指向性を常に確認し、それを社会的な目安と相互に合わせながら、相談の目的が生存にとって妥当なものであるかを検討した。この場合役にたったのが、総合的な理論である哲学的場所論であった。また、目先の問題だけではなく、深層の問題を確認し解決することが、真に生存に役にたつのであるから、箱庭療法などの技法を用いて、そのことも試みた。さらに、生存の根本は多様性であることを自覚しつつ関わった。具体的な生活習慣のすべてまで含んだ特定の価値観の押し付けは、時として、純粋な一元化を招き、それが一時的な成果に繋がっても、異質な勢力や個性的な衝動に無防備であることを、我々は知っている。このことは、本人が今回の最後に記した「個性」という言葉に象徴されている。筆者のいう通りの練習をさせるほど、筆者は本人と密接ではないのである。筆者はさまざまな知恵を提供しはするが、これからその個性を作るのは本人自身であり、直接の指導者である監督でなければならない。

さて、かくして今回は比較的良好な成果をあげたが、いつもそううまくいくとは限らないであろう。それらが、今後の筆者の課題となることは当然である。その課題を解決するためには、このような見方を自覚しつつ、さらに練習計画を立て、回復訓練に携わることもひとつの成果をあげる仕方である。また、そこから翻って、哲学的場所論の肌理細かい考察が再びここから開始される。それらが、筆者の次の課題である。

註

- 1) 拙論「西田幾多郎の場所論とヘーゲル弁証法」『福岡女学院大学紀要』第4号、福岡女学院大学、1994年、49-70頁。
- 2) 西田幾多郎「場所」(大正15年)『西田幾多郎全集』第四巻、岩波書店、1949年/1988年、208-289頁。
- 3) 具体的な技法については、宮田敬一編『ブリーフセラピー入門』金剛出版、1994年、やW・H・オハンロン著/森俊夫・菊地安起子訳『ミルトン・エリクソン入門』金

剛出版, 1995年, を参照のこと。

- 4) 上田閑照『場所 二重世界内存在』弘文堂, 平成4年, 36-37頁.
- 5) 『場所 二重世界内存在』37頁.
- 6) 荒木登茂子編著／荒木正見共著『心身症と箱庭療法』中川書店, 1994年.
- 7) 中村雄二郎『場所 トポス』弘文堂, 平成元年, 4-5頁.
- 8) 拙論「箱庭療法の基礎と文化的総合性」『北九州箱庭療法研究』創刊号, 1992年, 7-13頁.
- 9) 『場所 二重世界内存在』232-233頁.
- 10) “Die Gesammelten Werke von C.G.JUNG 6 Psychologischen Typen” Walter-Verlag, 1971/1976, S.503-512.
- 11) 河合隼雄『ユング心理学入門』培風館, 昭和42年, 101頁.
- 12) 市川宣恭編『スポーツ指導者のためのスポーツ外傷・障害』南江堂, 1987年, 113頁.
- 13) 拙論「心身一元論とスポーツアドバイス」『文化とセラピー』第2号, こども音楽センター紀要, 1992年, 49-52頁.
- 14) 栗山節郎／山田保『アスレチック・リハビリテーションの実際』南江堂, 1988年, 42頁.
- 15) 『アスレチック・リハビリテーションの実際』42頁.
- 16) 退行, 再統合とエネルギーについて筆者は『現象としての人格発達』中川書店, 1992年, 50-57頁, に纏めて記述している。

*小論においては, 相談者のプライバシーを保護する為, 論旨に影響しない程度に症例の事実の一部を改変したり, 故意に省略している。